

文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.110
2010 SUMMER・夏

リレーインタビュー

私のSWEET水都

金 容賢(キム ヨンヒョン)
韓国観光公社 大阪支社長

平城遷都1300年を迎えて 時空をつらぬく

文化の国土軸

脇田 修氏×桜花昇ぼる氏
×堀井良殷大阪21世紀協会理事長

企業メセナ最前線

株式会社ユニオン

立野純三社長

大阪21世紀協会・平成22年度事業計画

トピックス・ニュース

花の万博20周年、小林一三記念館開館、
住吉大社御田植神事 他

大阪21世紀協会ニュース

語り継ぎたい梅棹忠夫氏 警世の理念

誌上舞台・上方舞

山村流舞踊家 山村光さん



桜花昇ぼる氏
(OSK日本歌劇団)

財団法人 大阪21世紀協会

金 容賢 (キム ヨンヒョン)

韓国観光公社 大阪支社長

2010～2012年は「韓国訪問の年」です

昨年、日韓を往来した人の数は何と約460万人。ドラマや映画の影響だと思いがちですが、「韓流ブームだけではありません。たくさんの積み重ねの結果だと思います」と金支社長。「韓国訪問の年」が始まった今年、近くて近い国が本当に近くなった理由についてうかがいました。

日韓の意識を変えた「Together」

サッカー・ワールドカップの日本・カメルーン戦は、出張中の高松でお客様と一緒にテレビ観戦しました。みんなで熱くなって応援していると、2002年日韓共同開催大会のことが脳裏に浮かんできました。

共同開催が決定したのは96年6月。その年の忘年会で、私は弊公社の本部長から突然、「共同開催についてスピーチしてほしい」と要請されました。何の用意もしていなかったので戸惑いましたが、こんな言葉が自然に出てきたのです。「両国とも本当は独自開催したかったはず。それがこうなったのは神様から我々への『仲良くしなさい』との贈り物です」と。

この共同開催決定を契機に、両国の若者に変化が起きまし

た。「98年フランス大会に一緒に行こう」(together)と互いに呼び掛け、予選では韓国人が日本を、日本人が韓国を応援したので。これが起爆剤となり、両国間が本当に近くなりました。

昨年、訪韓した日本人は約305万人、訪日した韓国人は約159万人にも上ります。韓流ブームは確かに大きな影響力を放っていますが、それだけでは約460万人の往来に至りません。日韓国交正常化以来、step by stepの無数の積み重ねがあって、双方が互いの良さに気づいた結果だと思います。

大阪で伝統芸能のロングラン公演を

私が日本に赴任するのは今回で4回目です。ようやく日本の中心地である大阪へやってきました(笑)。食べ物はおいしいし、まさに活気があるし、とても楽しいです。回転寿司は大阪が発祥の地だと聞きました。実に不思議で、面白い発想ですね。

歴史や文化も魅力的です。しかし以前、韓国のお客様を伝統芸能に案内しようと思ったら、歌舞伎も文楽も休演中でした。その時、「ソウルのように常設公演があったら」と思いました。

実は、韓国でも16年前は伝統芸能を常設公演しているところがなかったんです。最初にNANTA(「サムルノリ」のリズムをベースにした非言語劇)がロングランに成功。文化公演による集客が



可能だと立証され、今では日々、たくさんの劇場で多彩な公演が行われています。

百済の都を再現した歴史文化団地が誕生

2010年から2012年は「韓国訪問の年」として、各地でイベントやキャンペーンを展開しています。その中で今年は特に忠清道(チュンチョンド)にスポットが当てられています。忠清道は今まであまり観光名所が整備されていませんでした。しかし9月には百済の都を再現した歴史文化団地ができ、世界大百済典(9月18日～10月17日)も催されます。百済と歴史的に深い縁のある奈良は、今年、平城遷都1300年。奈良と忠清道…東アジアが大きなスケールで繋がっていたことを実感します。

キム ヨンヒョン 韓国の「気」「興」「情」とは

韓国人は「初対面の人にやたら笑顔を見せてはいけない」という儒教的なしつけを受けていますので、日本の方は「愛想がない」と思うかもしれません。でもそれは誤解。いったん話を始めたら、すぐに友達になれます。何より情が深いのです。

韓国の魅力は、「気」「興」「情」のエナジーにあるといわれています。気は自然の力。日本でもパワースポットが話題になっていますが、韓国には至る場所にあるのですよ。興はW杯で見たような情熱。情は、日本人には特に共感できる感性だと思います。

金 容賢(キム ヨンヒョン)氏

1954年韓国京畿道・楊平(ヤンピョン)出身。慶熙大学院(観光広報学)専攻。81年韓国観光公社入社。87年名古屋支社次長、91年東京支社課長、98年仙台支社支社長を勤めた後、2001年から07年までソウルの本社にて人事や観光教育、マーケティングなどの役職を歴任する。09年から大阪支社長に就任し、現在に至る。



韓国観光公社 <http://japanese.visitkorea.or.kr>

時空を

ゲスト
脇田 修氏
(大阪歴史博物館館長)
桜花昇ぼる氏
(OSK日本歌劇団 トップスター)
聞き手
堀井良殷
(大阪 21 世紀協会理事長)

文化のつらぬく 国土軸

いま奈良県では、平城遷都1300年を記念する多彩なイベントが行われている。折しも上海万博では、大阪を出発した遣唐使船や遣唐使を物語にした舞台が話題を呼んでいる。今回は、そうしたイベントでも活躍するOSK日本歌劇団の桜花昇ぼるさんを迎え、大阪歴史博物館の脇田館長とともに、レビューから古代難波宮まで、時代や地域を越えてつながる私たちの文化について考えた。



桜花昇ぼるさんは、正統派2枚目から
ワイルドな役まで幅広くこなす。
(写真提供:株式会社OSK日本歌劇団)

がんばれOSK!



堀井 今回はOSK日本歌劇団のトップスター・桜花昇ぼるさんをお招きして、大阪歴史博物館にやってきました。

脇田 ようこそおいでいただきました。OSKといえば、私は子どもの頃、春や夏になるとよく父に連れられて千

日前の大劇(大阪劇場)へ、季節の踊りを観に行きましたよ。

桜花 そうですか。それはいつ頃ですか。

脇田 昭和12年に大阪市立曾根崎小学校に入ってからです。大劇の賑わいは、子ども心によく覚えています。

桜花 OSKのレビューが全盛を極めていた時代ですね。大劇は3000人収容のマンモス劇場で、入場待ちのお客様が劇場の周りを3重にも4重にも並ばれたと聞いています。

堀井 笠置シズ子や京マチ子など、ここからたくさん国民的スターが生まれました。

桜花 皆さんOSKの出身です。脇田先生の小学生時代といえばアーサー美鈴がOSKのスターで、SKD(松竹歌劇団/東京)の水の江瀧子さんと並び、「東のターキー、西のアーサー」と呼ばれていました。

脇田 そうそう。水の江瀧子が来たときは、「ターキー、ターキー」という観客の掛け声で劇場が割れんばかりでした。戦争がはじまって中学生はレビューを見ることを禁止されてしまいましたが、終戦で解禁になると「それっ」とばかり観に行ったのを覚えています。

桜花 大劇の全盛期をご存知の方のお話はとても貴重なので、心に刻んでおきたいと思います。

堀井 大正12年、道頓堀に大阪松竹座ができて、そのとき生まれたOSKというのは大阪の演劇文化の歴史に残る貴重な存在ですね。それが今日まで続いているというのは大変素晴らしいことで、このかけがえのない大阪の文化を絶やさないために、私たちもしっかり応援していきたいと思っています。

桜花 ありがとうございます。大阪松竹座の柿落としてレビューをしたのが、OSKの前身である松竹楽劇部でした。私たちは今、そうしたOSKが一番華やかだった頃にもう一度戻したいという思いで、活動させていただいています。

堀井 とくに近年は、OSK存続のために、いろいろご苦労されたと聞いています。

桜花 昭和32年に松竹から独立し、昭和46年以降は近鉄グループの子会社と

なって近鉄あやめ池遊園地の円型大劇場を本拠地としていました。その後、経営が難しくなって平成15年に解散したんですが、ありがたいことに私の上級生の方々が立ち上がって存続の会をつくられ、OSKの生まれ故郷である大阪に帰ってきました。そうして昨年2月から株式会社OSK日本歌劇団として独立し再出発しました。現在は公演回数も少しずつ増えてきています。

堀井 新しいOSKに大いに期待しています。是非がんばってください。私たちも、大阪が誇るOSKの素晴らしいエンターテインメントを盛り上げたいと思います。ところで桜花さんはどのようにしてOSKと出会ったのですか。

桜花 私は奈良県斑鳩町の出身で、母がOSKの舞台を見るのが大好きでした。家族アルバムには、まだ1歳にもならない私があやめ池遊園地の円形大劇場の前で母に抱っこされている写真があります。子どもの頃はあやめ池遊園地へよく連れていってもらいましたが、いつも遊園地は早く切り上げてOSKの舞台を観ていました。

堀井 OSKに入ろうと思われたのはいつ頃からですか。

桜花 OSKを志したのは高校生のときか



桜花昇ぼる(おうかのぼる)氏

奈良県斑鳩町出身。1993年OSK日本歌劇団入団。2008年『ミュージカル真田幸村』で主役を演じ、大阪松竹座でトップ披露公演、京都南座での源氏物語の薫の君で一躍話題に。170cmの長身を活かしたダイナミックなダンスと守備範囲の広い演技力、歌・踊り・芝居を巧みに披露する実力派。OSK日本歌劇団を背負うトップスターとして期待がかかる。

桜花昇ぼるさん(左)

(写真提供:株式会社OSK日本歌劇団)





桜花昇ぼるさん(中央)
(写真提供:株式会社OSK日本歌劇団)

らです。踊りも芝居も歌もやりたかった私は、背が高かったので普通の舞台向きではないと思い、子どもの頃から観ていたOSKで男役をしたいと思います。高校卒業後はOSK付属の日本歌劇学校に2年間通い、20歳のとき、円形大劇場でラインダンスの初舞台を踏ませていただきました。

堀井 レビューを続けていくためには若い人たちが次々養成していく必要があると思いますが、現在はいかがでしょうか。

桜花 学校法人としての日本歌劇学校があったのは円形大劇場があった時代のことです。劇団が解散する数年前からは学生募集をしなくなっていました。しかし、未来へつなぐ新人を育てる必要があり、存続の会が立ち上がってすぐ研修所という形で研修生を募集しました。以降、毎年募集しています。

堀井 志願者は増えていますか。

桜花 少しずつですが、増えてきています。といっても研修生はまだ6~7人。試験に合格する人がそれぐらいなんです。でも、OSKで長年培われたことがこうして受け継がれていくのは、とてもありがたいことだと思っています。

古代ロマンを共有する

堀井 今年は平城遷都1300年を迎えて、奈良県で『平城遷都1300年祭』が開催されています。桜花さんご出身が斑鳩町ということもあって、このイベントでもいろいろとご活躍だそうですね。具体的にはどのようなことをされていますか。

桜花 今年2月6日に奈良県の主催で、斑鳩ホール(斑鳩町)で聖徳太子を主人公としたミュージカルをやらせていただきました。おかげさまで客席は満席で、四天王寺や法隆寺を建立された聖徳太子の思いを伝えたいという私の夢が、これで叶えられました。また、平城遷都のイベントではないのですが、7月には上海万博の日本館のイベントステージで、奈良県代表としてミュージカルをやらせていただきます。

堀井 それはどんなお話ですか。

桜花 遣唐使・阿倍仲麻呂の人生をテーマにしたミュージカルです。阿倍仲麻呂は日中友好の祖として中国でも大変有名な人物で、唐の皇帝に重用され、中国で生涯を終えました。私はその阿倍仲麻呂を演じさせていただきます。

堀井 そうですか。阿倍仲麻呂は吉備真備(きびのみまきび)らと一緒に遣唐使船で中国へ渡り、吉備真備は帰国して重要な役に就くのですが、阿倍仲麻呂は中国の官僚になって大出世しました。途中で帰国しようとしたのですが、船が難破してまた長安に戻り、中国で一生涯を終えました。さぞや生まれ故郷の奈良に帰りたいことなのでしょう。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」という望郷の歌がよく知られています。

桜花 それを歌詞に織り込んだ歌もご披露します。30分ほどの短いミュージカルですが、そこに阿倍仲麻呂の人生をぎゅっと凝縮しています。

堀井 それは面白そうですね。

桜花 じつは不思議なご縁で、私が子どもの頃、阿倍仲麻呂が生まれた村にある



脇田 修(わきたおさむ)氏

1931年、大阪市出身。京都大学文学部卒業後、大阪大学文学部教授を経て同名誉教授。専門は日本近世史。2001年より大阪歴史博物館館長。『近世大坂の経済と文化(1994年・人文書院)』、『日本近世都市史の研究(1994年・東京大学出版会)』、『大坂時代と秀吉(1999年・小学館)』など著書多数。文楽や狂言を愛し、60歳を過ぎて狂言師・茂山千之丞に師事する。





大阪歴史博物館
大阪市中央区大手前4-1-32

安倍文殊院へ初詣に行くのが恒例でした。正直をいうと、阿倍仲麻呂がその村の出生であるということは知りませんでした。OSKの近鉄時代に、陰陽師で知られる安倍晴明のミュージカルをやらせていただいた、安倍晴明のゆかりの地だということは知っていましたが、阿倍仲麻呂のことは今回のことで勉強させていただきました。命がけで唐へ渡り国交を深めた、すごい人なんだって。

堀井 その阿倍仲麻呂らが乗った遣唐使船が、私たちがいる難波(なにわ)から唐に向けて出港しました。このことを思えば、いま奈良県が平城遷都1300年を迎えています、それは奈良だけの歴史ではないんですね。大阪府や奈良県というのは、明治以降の行政区画で分けられた、たかだか百数十年のこと。淀川水系や大和川水系で結ばれた難波と大和は、古代国家の形成過程ではほとんどひとつの地域として見なされていたと思います。平城京の時代にも難波宮(なにわのみや)が置かれ、難波は日本の政治の中心として、また貿易、防衛、外交の拠点でもあり

ました。つまり私たちはいま、平城遷都1300年を契機として、大阪や奈良といった行政域を越え、時空をつらぬく古代ロマンを共有する深いつながりを感じているわけです。



です。

桜花 博物館の上から、石の大きな土台が見えますね。

脇田 そこが後期難波宮の大極殿跡です。都会の真ん中でこうした遺跡が残っているのは、ここが旧陸軍第八連隊の練兵場だったからです。

堀井 だからビルで埋め尽されることがなかった。

脇田 そうです。大正初期、ここに陸軍の倉庫を建設しようとしたとき、当時陸軍省の技師だった置塩 章(おしおあきら)という建築家はその地下から古瓦を掘り出しました。この人はたいそう歴史好きな人で、その古瓦が難波宮の存在に関係するも

のではないかと思って大事にとっておられました。後年、それを大阪市立大学教授の山根徳太郎という考古学者に見せたことがきっかけで、昭和36年、山根先生によって難波宮跡が発掘され、難波宮の存在が証明されました。とはいえ、調査を始められた当初は関心を向ける人が少なく、「あんなところから宮跡が出るはずがない」「あんなのは難波宮ではなくて山根宮だ」などと、さんざん悪口を言われていました。

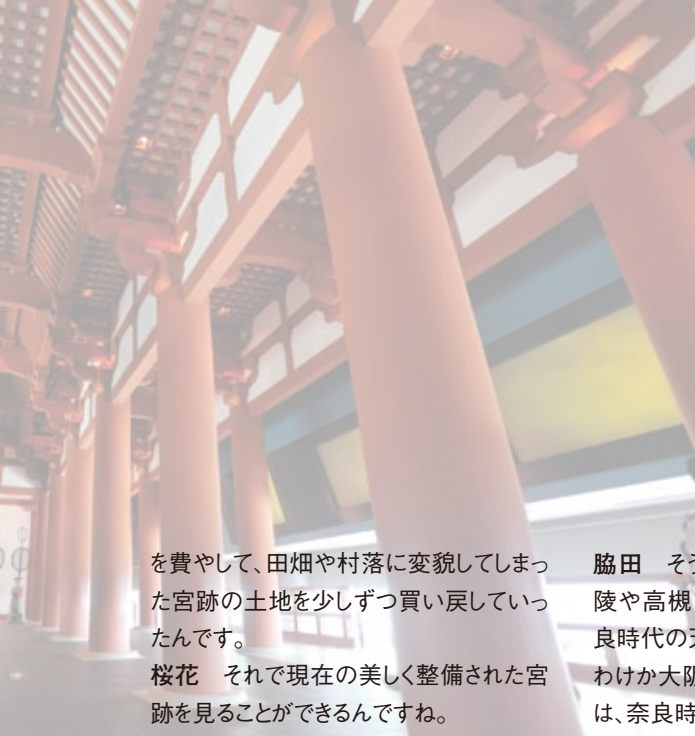
桜花 それは大層ご苦労なされたことでしょう。

脇田 しかし山根先生は断固として持論を曲げられませんでした。発掘調査のときは奥様が作られたお弁当持参でね。「喫茶店でコーヒーを飲む金があるなら、それを調査費に回す」とおっしゃって、ときには御堂筋のイチヨウの木の下でお弁当を食べたりもされていました。そうして遺跡が出始めた2月の風の強い日、私は遺跡近くのビルの屋上で、1時間にわたって山根先生から説明を受けました。あまりの寒さに閉口しましたが、先生は寒さなど気にもかけない。それぐらいの情熱があったからこそ、大遺跡を発掘することができたんでしょうね。

堀井 平城宮跡の整備も、最初は熱意ある個人の保存運動からはじまりました。そうして戦後、文化庁が多大な国家予算



後期難波宮の基壇跡
(大阪歴史博物館10階から
難波宮跡公園を臨む)



難波宮の大極殿の一部が原寸大に復元されている、大阪歴史博物館「古代のフロア」

を費やして、田畑や村落に変貌してしまった宮跡の土地を少しずつ買い戻していったんです。

桜花 それで現在の美しく整備された宮跡を見ることができるんですね。

文化で描く新たな広域地域像

桜花 平城遷都をはさんで前期難波宮と後期難波宮がありますが、どうしてそのようなことが行われたのでしょうか。

脇田 奈良時代は、宮殿とはいえ掘立柱に草葺きや板葺き屋根の建物でした。だから新しく建て替えたり天皇が代替わりしたりするのを機に、都ごと移してしまっただけかもしれませんね。平城京で天皇が7代続いたのは、それまでなかったことです。

堀井 平城京へ移って再び難波宮へ戻ってきたのは、藤原一族の影響から一時逃れるためだったという説を聞いたことがあります。聖武天皇は奈良の大仏を作る前に、恭仁京(くにきょう:現在の京都府木津川市)など、たびたび遷都をしています。

脇田 そうです。また、堺市の仁徳天皇陵や高槻市の継体天皇陵のように、奈良時代の天皇の御陵というのは、どういうわけか大阪府内に集中しています。大阪は、奈良時代から朝廷と密接な関係にあるんです。

桜花 継体天皇といえば、毎年10月に福井県越前市にある『たけふ菊人形』の会場で継体天皇をテーマにしたミュージカルも上演させていただいたことがあります。

脇田 継体天皇は、即位して大和に都を定めるまでは、越前地方におられましたからね。

堀井 そういう意味では、先ほども申しましたように、大阪や奈良といった行政区域にはとらわれない文化的な国土軸を描いてみると、日本人の文化や伝統の成り立ちが見えてくるように思います。これからの日本はハード系の国土整備だけではなく、文化という広域的な視点で国づくりを考えてみることも重要かと思います。

脇田 そうですね。畿内では、流通も文化もひとまとめにして考えたほうがいいでしょう。かつて日本海からの物資は敦賀や小浜で揚がり、琵琶湖を通過して京都や大阪に入りました。例えば鯖寿司(なれ寿司)が京都の食文化だと言われるのは、敦賀で作ったひと塩物の鯖寿司が、京都への

輸送中にちょうど良い加減に“熟(な)れ”たからだといわれています。また、敦賀から大阪まで下関回りの直行便ができると、北陸のさまざまな物や文化が瀬戸内海経由で大阪に入ってきました。

堀井 越前、畿内、瀬戸内をつなぐ大きな輪の物流ルートになっていたんですね。

脇田 例えば平安時代に江口という遊里(現在の大阪市東淀川区江口橋あたり)ができたのも、そういうつながりからです。江戸時代になると、井原西鶴が近江や大和から難波に出てきて成功する者の話を書いています。

堀井 近松門左衛門は、難波から大和へ男女が逃避行する人形浄瑠璃『冥途の飛脚』を書いています。

脇田 遊女梅川と忠兵衛が手に手をとって新口村(現在の奈良県橿原市)へ逃げる話ですね。近松門左衛門という人は、観客の出身地を考えて芝居を作っていました。ストーリーに親近感をもってもらえるように、土地のつながりをちゃんとつけている。だから面白いし、多くの人に受け入れられた。

堀井 なるほど、そうだったんですか。『冥途の飛脚』は冬の話ですが、昨今は都会から文化的な季節感もなくなってきているような気がします。脇田先生が四季折々の



難波宮跡からの出土品を展示(大阪歴史博物館「古代のフロア」)



難波宮跡の発見者・山根徳太郎教授の足跡を紹介(大阪歴史博物館「古代のフロア」)



聞き手
堀井 良殷 (大阪21世紀協会理事長)

のレビューを観ておられたというのは、大阪人はそうした季節感を楽しんでいたんだと思います。

桜花 OSKは毎春、大阪の松竹座で『春の踊り』をさせていただいています。だから「大阪の春はOSKから」と言ってもらえるととても嬉しいですね。

堀井 今年の夏は、京都の南座でも公演をなさるんですね。

桜花 はい。7月10日から1週間、坂本龍馬をテーマにしたレビューとOSKのグランドレビューの2部構成で行います。私は坂本龍馬役をさせていただきます。

脇田 ある演劇評論家が、日本のレビューはじつに美しいと高く評価されましたよ。

桜花 うれしいですね。「歌の宝塚、踊りのOSK」と言われるように、踊りにはかなり

力を入れています。また、私たちは日本の歴史をミュージカルで表現したいという思いも強く持っています。レビューは世界のどこにいてもありますから、私たちは日本ならではのものにも力を入れたいと。

堀井 阿倍仲麻呂の役作りでは、どのような苦労がありましたか。

桜花 とくに苦労というのはありませんが、私は役のゆかりの地をめぐるのが好きで、阿倍仲麻呂の役をいただいたときも安倍文殊院へ行きました。そこで阿倍仲麻呂が見た風景や考えたことに思いを馳せることで“場の力”がいただけるように思います。上海万博での公演がきまったときも、中国に行きました。

堀井 脇田先生は大阪歴史博物館の館長として、大阪や関西を元気づける博物館の役割や課題について、どのようにお考えでしょうか。

脇田 京都や奈良で生活している人は、自分たちは歴史的な土地にいるんだという思いをはっきり持っていますが、大阪の人にはそういう感覚が少ないように思います。それではちょっと困る。大阪というのは長い歴史をもった大都市ですから、私たちはそれを発信しなければならないと思っています。当館では、実際に難波宮の柱跡や大極殿跡が見られるような工夫をしたり、展示テーマを広げたりして、大阪に愛

着がもてるような工夫をして来館者を増やすことに努めています。

堀井 桜花さんは斑鳩で生まれ育って、奈良の歴史に対する思いはいかがですか。

桜花 思いは強いですね。ここで日本の国がはじまり都が生まれたんだと思うと、ものすごいエネルギーと興味深いものを感じます。あやめ池遊園地にOSKがあった時代は、大海人皇子(おおあまのみこ)や持統天皇など、万葉時代をテーマにしたものを多く上演していました。今になって思えば、それは日本発祥の文化をもっと知ってほしいというメッセージだったと思います。

堀井 なるほど。脇田先生が幼いころ観たOSKのレビューを覚えておられるように、子どものころに楽しんで歴史を知り、記憶にとどめてもらいたいですね。そうして自分たちが生活している場所に誇りや自信をもち、歴史や文化という広い視点で国づくりに思いをさせてほしいと思います。また、その拠点的役割をも果たす歴史博物館の存在は大きく貴重だと思います。私たちも、文化の国土軸の上に、未来の幸せの国づくりを考える努力をしていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

(2010年6月4日/大阪歴史博物館にて)

OSK日本歌劇団

宝塚歌劇団、松竹歌劇団(SKD)と並ぶ、日本の三大少女歌劇のひとつ。1922(大正11)年に松竹楽劇部として創設され、1943(昭和18)年、大阪松竹歌劇団(OSK)に改称。1957(昭和32)年に「株式会社大阪松竹歌劇団」として松竹から独立。1971(昭和46)年以降は近鉄グループの子会社となるが、2003(平成15)年に一度解散した後、劇団員有志により再結成。2009年より株式会社OSK日本歌劇団として独立。「OSK」は、旧名「大阪松竹歌劇団」の略。

松竹座

1923(大正12)年、大阪市中央区道頓堀にできた大阪初の洋式劇場。柿落としには映画の幕間に松竹楽劇部第1回公演(アルルの女)が上演された。正面玄関のアーチは大阪大空襲でも倒壊しなかった。

アーサー美鈴

OSKの往年のスター。桜花昇ぼるさんは「わが歌ブギウギ 笠置シズ子物語(2005年12月~06年2月 大阪松竹座他)」に外部出演し、ユリ五十鈴役として、アーサー美鈴を演じた。

大阪劇場

1933(昭和8)年~1967(昭和42)年、大阪・道頓堀にあった映画館。当初は東洋劇場と呼ばれていたが、開館翌年に松竹系企業が買収し「大阪劇場」と改称。OSKレビューと松竹映画の2本立て興業を行い、大劇(だいげき)と親しまれた。

レビュー

歌、踊り、音楽を組み合わせ、衣裳や照明などの豪華な演出を効かせたショー形式の舞台芸術。

ミュージカル

音楽を主体とし、芝居、歌、ダンスなどが一体となって劇的效果を高める演劇や映画。全編を通して一貫したストーリーで進行するものが多い。

阿倍仲麻呂(あべのなかまろ)

698~770年。奈良時代の遣唐留学生。吉備真備らとともに入唐。玄宗に仕え、李白、王維ら唐の著名文人と交流した。753(天平勝宝5)年、帰国の途上で難破。戻って唐で通算54年間を過ごす。

感動こそが社会貢献活動を持続させる

建物のドアハンドルの専門メーカーとして、90%近くの国内シェアをもつ株式会社ユニオン。社長の立野純三氏は、財団法人ユニオン造形文化財団やセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの設立に関わるなど、メセナや社会貢献活動に携って長い。

ユニオン造形文化財団を設立

1958年に創業したユニオンは、日本の高度経済成長やバブル景気の崩壊など、建築業界の浮き沈みの直中を生き抜いて半世紀。東京オリンピック会場や大阪万博の全パビリオン、京都迎賓館などの建築に関わり、国内外に「ドアハンドルならユニオン」と知らしめてきた。

同社がユニオン造形文化財団を設立したのは1994年。日本の造形文化の向上に寄与したいと、建築や環境分野における調査研究、国際交流などを助成してきた。同時に『ユニオン造形デザイン賞』を創設し、毎年、建築や環境設計を専攻する学生や若い企業人の優れた才能を顕彰。選考委員には建築家の安藤忠雄氏（東京大学名誉教授）をはじめ第一級の専門家が名を連ね、次代を担う優れた人材の育成に努めている。

立野氏は、ある建築家が「あのとき財団の助成があったからこそ、今こうして活躍できている」というのを聞いてとても嬉しく思ったことがある。「そういう才能ある人たちとジョイントして、新しい建築文化の発展に寄与できればうれしい。ひいてはそれが当社の発展にもつながる」と、財団活動の継続に意欲を示す。

立野氏は、ある建築家が「あのとき財団の助成があったからこそ、今こうして活躍できている」というのを聞いてとても嬉しく思ったことがある。「そういう才能ある人たちとジョイントして、新しい建築文化の発展に寄与できればうれしい。ひいてはそれが当社の発展にもつながる」と、財団活動の継続に意欲を示す。

優れた人材に仕事がまわる環境を

立野氏は、近ごろ外国に行って少し気掛かりに思うことがある。行く先々で、日本人の若者を見ることが極端に少なくなってきたからだ。「元気が良いのは中国や韓国の若者ばかり。彼らは流暢に英語をあやつり、精力的に仕事をこなしている（立野氏）」。

日本の経済発展のためには、多くの日本の若者が海外で活躍し、もっと外需を増やさすべきだという。母校の甲南大学で経営学の非常勤講師を務める立野氏は、学生たちに「内向きの姿勢で経済が活性化することはあり得ない」と檄を飛ばす。

とはいえ大阪の優れたクリエイターの多くが、いまや海外ならぬ東京へ流出しているのが現状。社団法人関西ニュービジネス協議会の会長でもある立野氏は、大阪でそういう人材を育てるためには、まずは彼らが仕事を受注できるようにすることが第一であり、企業も行政もそのための投資を惜しんではならないと強調する。

忘れられない笑顔

立野氏は、1986年、世界の子どもの生命や暮らしを守る『セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン』の設立に関わり、現在、同



立野純三（たのの じゅんぞう）氏

昭和22年生まれ。甲南大学卒業後、(株)青木建設入社。昭和48年、(株)ユニオン入社。平成2年、同社代表取締役社長。(財)人ユニオン造形文化財団理事長、(社)関西ニュービジネス協議会会長、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン名誉理事長、大阪市教育委員会委員長(平成19～20年)など要職兼務。

組織の名誉理事長を務める。初めての活動が、フィリピンのイロイロ島に200万円を寄付して小学校を建設したこと。校舎が完成したときの子どもたちの輝く笑顔を、立野氏は忘れることはできない。そうした感動こそが、活動を継続する原動力となっている。「昨今の経済環境では、企業がメセナ活動などに積極的になれない気持も分かる。しかし、メセナは金に余裕があるからするのではなく、それをする事で感動を覚えなくては続けられない」という。



第16回ユニオン造形文化財団表彰式で賞を授与する立野氏（左）（平成22年3月／ヒルトン大阪にて）

株式会社ユニオン／立野純三氏の父・立野一郎氏が昭和33年に設立。現在、資本金4億4千800万円、社員数182名。本社・大阪市西区。ドアハンドルをはじめとする建設環境金属製品を製造・販売。

地域の文化を育て、関西・大阪の活力

平成21年度より自立民営化による再スタートを切った大阪21世紀協会は、これまで培ったネットワークとノウハウを活用し、関西・大阪の「文化力向上」、「イメージ向上」、「水都大阪まち育て」を柱とした事業を展開します。

1. 文化力向上

学びの場づくりや人材育成、文化力向上のための課題に取り組みます。

『21世紀の懐徳堂』プロジェクト

大学などの研究機関や大阪市と連携し、知的ネットワークの成果を社会に還元。「大阪大学21世紀懐徳堂」との連携や「ナカノシマ大学」への協力、アーティストを経済界や市民に紹介する「アートアッセンブリー」、関西社会人大学院連合との連携によるまちづくりのための共同講座の開催など、学びの場、発表の場、交流の場づくりを行います。

実施時期：通年



250DOORS

昨年度実施の200ワークショップ(200DOORS)をさらに拡大。大阪で活躍するさまざまな分野の講師を迎え、市民が教え・学ぶワークショップ・シティー構想を推進します。学生をコーディネーターとして参加させることで、伝統芸能からアート、ファッションなど大阪の生活文化を体験させるとともに、人材育成にも役立っています。

実施時期：7月31日～8月24日

実施場所：大阪市立芸術創造館、芝川ビル、中央公会堂 他

200DOORSの講師陣(一部/平成21年7月)



関西・大阪文化力会議

文化人・経済界・学界などのオピニオンリーダーやまちづくりで活動している市民・NPO関係者による会議を開催。関西・大阪が抱える課題を抽出・議論することで、関西・大阪の文化力向上の方策を探ります。また、前回の会議で提案された内容もふまえ、会議の成果をより深めていきたいと考えております。

予定時期：平成23年1月18日

開催場所：大阪国際会議場

平成21年度実施の様様
(平成22年1月28日/大阪国際会議場)



大阪文化祭賞

芸術文化活動の奨励と普及を図り文化振興の機運を醸成することを目的に、大阪府・大阪市とともに、5～6月に大阪府内で行われる公演等を対象に「大阪文化祭」を開催。参加公演の中から注目すべき成果をあげた個人または団体に賞を贈呈します。また、受賞者には副賞を授与するとともに公演の機会を設けるよう努めます。

実施時期：5～6月(大阪文化祭)、8～9月(贈呈式)



林 裕氏
(チェリスト/平成21年度
大阪文化祭賞グランプリ)



菊池まどか氏
(浪曲/平成21年度
大阪文化祭奨励賞)

アートストリーム2010

大阪の若いアーティストやクリエイターを発掘し、作品発表の場や出版社・美術関係者とのビジネスマッチングの場を提供します。本年は10回目を迎えることを記念して、過去の「アートストリームアワード」受賞者を主体に選出した「アーティスト10人展」として開催します。また、著名美術家と若手アーティストとの交流会も企画中です。

実施時期：平成22年9月7日(火)～20日(月)

開催場所：サントリーミュージアム [天保山]

2009年度の各賞受賞者



を取り戻そう!

2. 関西・大阪のイメージ向上

関西・大阪のイメージ向上につながるブランド情報を、立体的・戦略的に編集し、発信します。

関西・大阪ブランドの映像発信

関西国際空港や公共スペースなどを活用し、関西・大阪の魅力を伝える映像情報を発信。地域のイメージ向上を図ります。また、当映像を著作権フリーのライブラリーとして利用拡大を図ります。



WEB放送局の運営

関西・大阪の都市ブランドイメージ向上をめざし、きめ細かな文化情報をタイムリーに発信。大阪のさまざまな芸術・文化活動に関する情報を、動画やブログも交え、幅広く提供します。実施時期：通年



ブランド情報誌「OSAKA*文化力」の発行

大阪21世紀協会唯一の紙媒体・定期刊行物として、とくにオピニオンリーダーや文化に関心の高い層に向けて、関西・大阪の文化に関する諸課題や、協会の取り組み・活動状況を発信します。発行回数：年3回発行（各12,000部）



御堂筋等におけるバナー展開

御堂筋や長堀通りなどの街路灯に掲揚するイベントバナーへの特別協賛企業を募集。都市景観の向上をはかるとともに自主財源の確保につなげます。実施時期：通年



コンテンツ制作

大阪が誇る世界文化遺産の伝統芸能や、「夏祭り」などの伝統行事、関西・大阪の魅力的なブランド資源を編集し、映像コンテンツなどの手段で広く発信します。実施時期：通年



住吉大社「御田植神事」

3. 水都大阪まち育て

「水都大阪」再生に向け、市民・NPOによるまちづくりや水辺の賑わいづくりを支援・協力し、水都大阪の魅力を発信します。

「水都大阪」の継続・継承

水辺を活用した市民・NPOのまちづくりや賑わい創出を推進。「平成OSAKA天の川伝説」への参画や八軒家浜・中之島界隈での賑わい創出活動への協力により、水都の活性化に貢献します。また、平成20年度に作成した「水都大阪・再発見クルーズ」についても引き続き活用を促進を目指します。実施時期：通年



平成OSAKA天の川伝説
(平成21年7月7日/大川)

OSAKA水上音楽パレード

昨年「水都大阪2009」の最終日に、水上安全協会とともに開催し好評を博した「OSAKA水上音楽パレード」。その定着を目指し、第2回目の実施に向け取り組みます。八軒家浜を中心に、大阪市内の川を航行する全種類の船舶によるパレードを実施するほか、高校吹奏楽部による水上マーチング船でキタとミナミを結び、学生吹奏楽の発表の場として、御堂筋パレードにかわる新たな水上の場を提供します。実施時期：10月



大阪城サマーフェスティバル2010

大阪の代表的な歴史的資産である大阪城および上町台地周辺で夏季に開催されるさまざまなイベントを集約。行政、経済団体、民間企業、マスコミ等の各主催者間の連携と情報交換の結節点として活動します。具体的には、各主催者と共同の広報活動を展開するほか、昨年初めて実施した大阪城西の丸庭園の共同舞台プロジェクトを今年も実施。大阪らしい文化コンテンツを集めた屋外の舞台週間をつくり、文化・国際都市大阪をPRします。実施時期：7月7日(水)～9月5日(日)



活気溢れる当時の大阪を振り返る 花の万博20周年記念イベント



球根育成用に廃棄されるチューリップの花で作られた
フラワーカーペット(鶴見緑地公園)



「花の万博」コンパニオンのユニフォームを展示
(メモリアル展示／鶴見緑地公園)

アジア初の『国際花と緑の博覧会(1990年4～10月)』が開催されて20年を迎えた今年、財団法人国際花と緑の博覧会記念協会は、ゴールデンウィークを中心に多彩な記念イベントを開催しました。

オープニングとなった『花の万博20周年記念式典(4月30日／いずみホール)』では、同協会の佐藤茂雄副会長が「花の万博は“自然と人間との共生”という理念を初めて掲げ、人類が地球市民の一員であることを広く世界の人々に訴えかける絶好の機会となった。今後も次世代への理念継承を目指した取り組みを進めていきたい」と挨拶。一般・招待者650人の来場者に、バイオリニストの奥村愛さんらによる記念コンサートや、花博開催時の映像や花博協会20年の歩みが紹介されました。また、かつての花博会場の鶴見緑地公園では、『花・緑フェスタ』として、チューリップ33万本の花びらで描かれた“フラワーカーペット”や、花博開催時の様子を伝えるメモリアル展示、水の館ホールでの各種団体展示などが行われました。

一方、今年は大阪万博(1970年3～9月)が開催されて40周年を迎え、唯一現存する『鉄鋼館』が、大阪万博の記念館『EXPO'70パピリオン』としてリニューアルされました。



大阪万博はアジア・日本初の国際博覧会で、入場者は約6,220万人と万博史上最多。花の万博は日本で4回目の国際博覧会で、当時史上最多の国・国際機関が参加し、入場者は2,300万人と、いずれも大成功を収めています。

花の万博20周年記念式典で
挨拶する佐藤茂雄氏

約200人が狂言と文楽を堪能 関西経済連合会「伝統芸能教室」



関西経済連合会は、関西発祥の伝統三芸能(能楽・文楽・歌舞伎)の普及支援と国内外への情報発信の強化をめざす事業に取り組んでいます。今年3月29日には、ABCホール(ほたるまち)で、約200名の参加による伝統芸能教室『伝統芸能へのいざない』を開催。和泉流狂言師の小笠原匡さんや文楽三味線鶴沢清丈さん、人形遣いの吉田玉翔さんらを迎え、狂言と文楽の知識や演技方法などが解説されました。また、狂言と文楽をコラボレートした話題作『狂言文楽浪花話』も上演。関経連では、この他にも企業人向けの伝統三芸能入門連続講座の開催や学校向け入門ビデオの活用などにも取り組んでいます。

阪急・東宝の創設者 小林一三の旧邸を記念館としてオープン



展示室

財団法人逸翁美術館(大阪府池田市)は、4月22日、阪急電鉄、阪急百貨店、東宝の創業者である小林一三(1873-1957)の旧邸(雅俗山荘)を、『小林一三記念館』としてオープンしました。

逸翁美術館は、1957年の開館以来、雅俗山荘を展示の場として小林一三が蒐集した絵画や陶磁器などの美術工芸品約5,500点を公開してきましたが、2009年10月に同美術館と蒐集品を雅俗山荘の近くに移設。折しも雅俗山荘や茶室などが国の有形文化財指定を受けたのを機に、それらを当時の状態に復元して再び公開するにいたったものです。



展示室

小林一三といえば、鉄道事業のほか、沿線の宅地開発や宝塚歌劇、映画などを成功させた歴史に残る起業家。記念館では、その生い立ちやさまざまな事業の軌跡、政界への進出など、一般にあまり知られていない活躍も含めて当時の資料や写真、映像、ジオラマなどで紹介されています。茶人としての逸翁(小林一三の雅号)が丹精した茶室や庭園を散策したり、併設のレストランでは当時の空間を肌で感じながらランチやディナーも楽しめます。

写真提供:財団法人逸翁美術館(3点とも)



外観

小林一三記念館

大阪府池田市建石町7-17 TEL.072-751-3865

開館10:30~16:30(入館受付は16:00まで)

※月曜、年末年始休館(但し月曜が祝日、振替休日の場合は開館、火曜休館)

入館料:300円(美術館共通券:1,000円)

レストランにつきましてはお問い合わせください。TEL.072-751-1333

都会の中で古式に則った民俗行事 住吉大社「御田植神事」

神官(右)より早苗を授かる植女(左)



住吉大社(大阪市住吉区)で6月14日、穀物が豊かに育ち、稲穂が実る秋を迎えるための儀式『御田植神事』が行われました。田植え行事は全国各地で行われていますが、なかでも住吉大社は古式に則った格式を守り、華やかで盛大に行っている祭りとして、重要無形民俗文化財に指定されています。

住吉大社の御田植神事は、神功皇后が田んぼを設け、御田を作らせたのが始まりとされ、植え付けられる苗には、強力な穀霊が宿ると考えられています。植女(うえめ)や稚児など、行事に関わる人はお祓いを受け、第一本宮で神事の奉告祭を行った後、行列を整えて御田へ。中央舞台や御田の周囲では、田や苗に宿る穀物の力を増すといわれる舞や、総勢200人による無形文化財の住吉踊りなども繰り広げられ、多くの見物人を楽しませました。

大阪21世紀協会では、この伝統祭事を支援しています。



御田植風景



「大阪21世紀」1998年春号インタビューにて

語り継ぎたい梅棹忠夫氏 警世の理念

(2010年7月3日ご逝去)

財団法人大阪21世紀協会 理事長 堀井良殿

梅棹忠夫氏の存在そのものが巨大な知の森でした。そこから流れ出でる源流水が社会を潤し恩恵をもたらしてきたと改めて強く思います。

学問的業績はいわずもがな、関西や大阪を中心に社会の知的リーダーとして大きな役割を果たして来られました。戦後、多くの都市の文化政策や都市経営の基本的な精神的機軸は梅棹理論をもとに展開されたといっても過言ではありません。

1982年の大阪21世紀協会設立にあたって中心的メンバーとなり、常任理事・企画委員会座長として一貫して“文化立都”の旗のもと指導推進にあたられました。

“文化がないと都市らしい都市にはならない。文化があればこそ、めしが食えるのだ。もともと大阪は大文化都市であり、西日本の首都であった。その自覚を取り戻すべきだ。すべてがカネに収斂するような価値観だけでは尊敬される都市にはなれない。

世界から尊敬され、世界で舞いを舞えるような人材が育つ都市になってほしい。”

梅棹先生から折に触れて伺った鮮烈な言葉が、よみがえってきます。つい最近お会いしたときも、わざわざ呼び止められ、大阪の文化事情を憂いつつ、理念と志の継続・継承を求めておられました。

大阪が知の森の繁茂する文化都市に少しでも近づけるのか、これからはきっと天上から私たちを叱咤激励しつつ見守って下さっている違いありません。



大阪21世紀塾記者発表(1998年3月23日)にて

インターナショナルワークショップフェスティバル 250DOORS開催

平成22年7月31日(土)～8月24日(火)

大阪市役所、大阪市中央公会堂、芝川ビル、元・立誠小学校(京都市)、
大阪市立芸術創造館、大阪市旭区民センター

500円で演劇や音楽、古典芸能などさまざまなジャンルの体験講座を楽しめるインターナショナルワークショップフェスティバル。平成19年に38講座(38DOORS)でスタートしたものが、平成20年に

尺八講座(昨年度)

今年度の講師陣(一部)



浪曲弟子入り講座(昨年度)

「100DOORS」、昨年は「200DOORS」と年々拡大を続け、今年では従来の大阪市に加え、京都市にも会場を設け、「250DOORS」として開催します。今年も関西独自の「おもろい」や「こだわり」をキーワードに、世代・ジャンル・国境を越えて、できるだけ多くの皆さんが気軽に参加いただける「文化創造の扉」を提供していきます。

去る7月1日には、会場のひとつである芝川ビルで、ワークショップ講師にも多数参加いただき、記者説明会を開催し、マスコミなどで幅広く取り上げられています。

大川に煌めく5万個の星

平成OSAKA天の川伝説

7月7日は七夕の日。LEDを光源とする光の球5万個を、市民の願いを託して大川に放流し、天の川を創り出す「平成OSAKA天の川伝説」。昨年は実験回として実施され、今年が第1回。今回から大阪21世紀協会も主催に加わりました。一夜限りの光の大川に、詰め掛けた約3万人が酔いしれました。市民の力によるこの催しは、新しい大阪の景観創造に向け、10年、20年と続いていくプロジェクトとなることを目指しています。

天の川をバックにゴスペルを熱唱する「アノインティッド・マスクワイヤー」



後援・協賛イベント

第22回なにわ淀川花火大会

◆8月7日(土)花火打上19:50~20:40・荒天の場合8日(日)に順延／上流・新御堂筋「淀川鉄橋」、下流・国道2号線淀川大橋／無料(協賛観覧席有)／問合せ:なにわ淀川花火大会事務局 ☎06-6307-7765(24時間音声ガイダンス)



第33回島本夏まつり

「子どもたちに夢と思い出を、住む人の連帯と融和」をテーマに、盆踊りと夜店による夕べ。
◆8月7日(土)17:00~21:30／島本第一中学校グラウンドおよび周辺／入場無料／問合せ:島本町商工会青年部 ☎075-962-5112、FAX075-962-0230

第54回大阪薪能

◆8月11日(水)~12日(木)17:30~20:30・雨天の場合13日(金)に順延／生國魂神社境内／前売3,000円、当日3,500円、学生2,000円／問合せ:生國魂神社 ☎06-6771-0002、FAX06-6771-0003

松尾塾子供歌舞伎公演

伝統芸能の歌舞伎を教え、日本人の礼節と心を伝えようと開塾。今回は「実録先代萩(竹本連中)」他を上演。◆8月14日(土)14:00開演、15日(日)12:00開演／国立文楽劇場／6,000円／問合せ:松尾塾子供歌舞伎 ☎03-3407-7778



第30回記念大阪城薪能

観世清和・観世流能「翁」、梅若玄祥・観世流能「安宅」、大藏流狂言「賞鯉(もらいむこ)」
◆8月25日(水) 18:00~21:00(雨天中止の場合は26日に順延)／大阪城西の丸庭園／一般・前売3,600円(当日4,500円)、高大生・前売2,000円(当日2,500円)、中学生以下無

料／問合せ:読売新聞企画事業部 ☎06-6366-1848(10:00~17:00)

第10回記念佐伯紀久之会別会能

佐伯紀久之・能「鸚鵡(おむ)小町」、観世清和・能「鶴(ぬえ)」ほか◆9月20日(月・祝)13:00~17:00／上田観正会能楽堂(神戸)／一般8,000円(前もっての座席指定は1,000円増)／問合せ:佐伯紀久之会 ☎078-731-2727

第19回枚岡薪能

木村正雄他・狂言「柿山伏」、大江又三郎他・能「頼政」、解説「三修羅について」◆9月25日(土) 17:30~20:30／枚岡神社境内特設舞台／無料／問合せ:枚岡薪能事務局 ☎FAX0743-76-0177

小原流大阪支部創立100周年記念花展

小原流は明治中期に創立者・小原雲心が大阪で「盛花」という新形式を創案。大阪支部は平成22年に創立100周年を迎え、記念花展を開催。◆10月7日(木)~12日(火)10:00~20:00／高島屋大阪店／前売800円、当日1,000円／問合せ:小原流大阪支部 ☎06-6241-5223、FAX06-6241-6166



水都おおさか森林(もり)の市2010

木と触れ合う体験を通して、大人から子どもまで森林の大切さを楽しみながら学ぶ。◆10月9日(土)~10日(日)10:00~16:00／近畿中国森林管理局、OAP、毛馬桜之宮公園周辺／入場無料／問合せ:近畿中国森林管理局 ☎050-3160-6753、FAX06-6881-3564

第11回天満音楽祭

「音づくり・仲間づくり・街づくり」をテーマに、天満を中心に大阪市内各所でライブを実施。

◆10月10日(日)10:00~18:30(会場毎に異なる)／北区民センター、大阪天満宮、宝珠院、専念寺、明福寺、大阪市立扇町総合高校、OAP他／入場無料／問合せ:天満音楽祭実行委員会 ☎06-6351-3450、FAX06-6358-1040

体操フェスティバル 2010 OSAKA 国際大会

体操が大好きな仲間の集い。◆シティ・パフォーマンス10月15日(金)12:15~13:00(大阪市庁舎前広場)、フェスティバル・デイ10月17日(日)10:00~15:00(大阪市立中央体育館)／無料(当日整理券必要)／問合せ:NPO法人MGLA事務局 ☎06-6374-5274、FAX06-6374-0373

天満・天神バレエ&ダンスフェスティバル2010

地域のダンスの向上をめざし、世界に羽ばたくアーティストダンサーを発掘。◆10月17日(日)12:00~17:30(発表会)、18:00~各ジャンルのスペシャルアーティストの競演／大阪市中央公会堂／前売3,500円、当日4,000円／問合せ:天満・天神バレエ&ダンスフェスティバル2010実行委員会 ☎06-6351-5224、FAX06-6351-5228



升の市

日本の「市」の起源ともいわれ松尾芭蕉も参加。江戸時代の市の賑わいを再現。◆10月17日(日)9:30~15:30／住吉公園・松尾芭蕉句碑周辺／入場無料／問合せ:「升の市」実行委員会 ☎06-6782-6274、FAX06-6782-6277

※イベント内容の詳細については、各問合せ先にお問合せください。
※ここに紹介する以外にも、大阪21世紀協会は多数のイベントなどを後援しています。

大阪21世紀協会賛助会員へ入会のお願い

大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費(何口でも結構です)

- 法人会員一口につき年会費10万円
- 個人会員一口につき年会費1万円

特典

- 1.協会が発行する刊行物の配布
- 2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
- 3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ(財)大阪21世紀協会 総務チーム TEL.06-6942-2001 FAX.06-6942-5945

誌上 舞台 上方舞

江戸の「踊り」に対して、京阪神で生まれた上方の舞。江戸期から続く山村流、吉村流、煤茂都流、井上流を上方四流と呼ぶ。なかでも山村流は文化三年に山村友五郎が大阪で創流したのもとも古、流派であり、現在も唯一、大阪を本拠にする。

舞踊家



山村光 やまむらひかり
山村流宗家の長女として大阪に生まれる。3歳から祖母四世宗家に手ほどきを受ける。早世した母・糸の意志を継ぎ、兄・六世宗家山村若と共に山村流を守る。平成5年より「山村光リサイタル」を主催。昭和62年咲くやこの花賞、平成3年7年大阪文化祭奨励賞、同11年大阪文化祭賞、同22年舞踊批評家協会新人賞、宝塚音楽学校日本舞踊講師

上方舞という名前を付けられたのは、坪内逍遙さんとも花柳章太郎さんともいわれられております。その昔は、大阪には山村流しかなく、舞といえれば山村のことで、山村舞とも呼んでいたようです。流祖が歌舞伎の振付師ですので、歌舞伎や文楽の中に本来の山村流の振りがございまして、「能」から振り付けた「本行物」、動物などをおもしろおかしく唄いこんだ「滑稽物」、風土や季節ごとの風情・風俗を写した演目などが伝えられております。

大阪という土地柄、宴席の座敷には舞が欠かせませんので、埃をたてないよう一畳の空間でも舞えるように配慮されてきたことが舞台芸術として育った「踊り」とは違ふところ。振りは抑え、心情を溜めて溜めて表現いたします。媚びたり、見せつけるような舞は御法度です。

そんな伝統から芸妓さんがお稽古しはるのは当然のことですけれど、能を背景にもつ行儀の良い舞として商家の子女の行儀見習いの心得とされておりました。谷崎潤一郎の「細雪」にも、四女・妙子が地唄の「雪」を舞う姿が描かれています。

「地唄舞」ともいわれますように、江戸唄に対して、地元(上方)の三味線音楽であった流行り唄「地唄」に振り付けられた演目があります。たとえば、「いざや」「塚住吉」といった演目は「いざや行きましよう住吉へ」と、芸妓を引き連れて住吉詣りというお大尽遊びの情緒を写

上方文化の真髄、ここにあり。



案内人 山村光

していきまして、住吉さんの反橋を渡って、五代力さんを拝み、名物のゴロゴロせんべいや麦わら細工、つなぎ貝を売っている様子が出てまいります。

私どもの師範試験の課題のひとつ「ゆき(雪)」は、宗右衛門町の芸妓さんだった女性が出家し、雪の夜に鐘

の音を聞きながら、昔のことを思い出し、涙にくれるという舞なんです。鐘の音はおそらく谷町や上町のお寺から聞こえてきたのでしょうか。

南地大和屋でお正月に黒紋付で盛装した芸妓さんらが舞う「十二月」、また「浪花十二月」では、元旦から始まり、十日戎や宝恵駕籠、二月は初午、四天王寺の彼岸会やら名高いとされてきた難波のサツキ、天神さん、など、江戸末期から明治初期にかけての年中行事や風俗

が描かれる上方の花街の匂いが色濃く残る作品です。

江戸期の名優・三世中村歌右衛門(成駒屋)は本来大阪の役者で、江戸での興行に下り、再び大阪に上った時に江戸の土産として、流祖山村友五郎の振付で「傾城」「越後獅子」「座頭」「業平」などの七役をひとりで演じた「慣ちよつと七化」で大評判を取ったそうです。

以前から家元(光さんの兄、山村若さん)は、歌右衛門の七変化を描いた浮世絵を蒐集してありまして、今般、それらをもとに流儀に残る振りに新たに振付け、全曲通して上演いたしました。この復元も大阪が芸能文化の中心だった歴史を知るやすがになると思っております。

祖母、四世宗家は東京にお稽古場を持つことさえしませんでした。大阪を離れず、大阪で舞うてきましたので、山村の舞すべてに大阪の匂いや情緒を肌身に感じていただけだと信じております。

私の小さい時は、天神さんの時には鱧を食べ、床几を出して火花を見るような暮らしでしたが、いまは大阪の風景や風物もずいぶん変わってしまいました。それでも人が心で感じることはおなじです。お弟子さんには、ふだんからお月さんひとつ見るにしても、じっくり深く感じる心をだいにしなさいというてます。そうすることによって、山村の理想としております「淀みのない、澄んだ水の流れるような舞」に近づけるのやないかと思っております。